

或るドイツ人の熊本―別府徒歩旅行（明治34年）

ここに訳出紹介するのは、明治34年の秋にハインリヒ・ヴォルトマン（Heinrich Wortmann）というドイツ人が中部九州を徒歩で旅した際の見聞録である。ベルリンで日本人の玉井喜作が編輯発行していた独文雑誌『東亜』（Ost-Asien）の第40号（1902〔明治35〕年3月発行）に掲載されたもので、原題は「日本・九州徒歩旅行」（Wanderungen auf Kiushu, Japan）であるが、内容から表題のように変えた。

著者のヴォルトマンについては経歴等一切不詳だが、想像するに、日本からドイツに帰国する途中、船が長崎に碇泊した数日間を利用して中部九州への旅行を試みたのではあるまいか。短いものではあり、とくに深い観察が見られるわけではないが、熊本から別府まで徒歩で旅した恐らく最初の西洋人の記録として興味がある。

風景のすばらしさにもかかわらず、外国人が殆ど訪れることのない日本の数少ない地域に中部九州がある。鉄道は海岸沿いにだけ走っているが、内陸部を旅行しようとする者は人力車又はスプリングのない小さな車、いわゆる馬車を利用できる。だが、山や谷を越えて行くひどく骨の折れる道は、この方法による旅を決して楽しいものにしない。そこで私は一枚の地図と一冊の日本語辞書を用意して徒歩で出かけることにした。出発地には、長崎からは船か鉄道で行ける重要な地方・駐屯都市熊本を選んだ。市の近郊にある水前寺公園は優雅なたたずまいで有名であるが、それはもっともだ。湧き水、無数の金魚でにぎやかな池、楽しげに駆け廻る子供たち、きれいな着物の粋な日本婦人たち、これらすべてがおだやかな夕陽に輝らされて、まさに日本にだけしか見られないような独特な魅力のある光景を呈していた。

熊本から道はまず馬場楠を経て戸下に至る。この辺の街道の状態は大変に良い。道の両側には見わたすかぎり水田が広がっている。木々の間にある大規模な農場は裕福な暮らしを暗示している。さらに農民たちに多くの副収入をもたらしているのは養蚕である。家々の前で主婦や娘たちが絹の糸を巻く仕事に従事しているのが見られた。この目的のため繭がお湯の中に入れられ、さなぎを包被していた糸が器用な手でつかみ取られ、その3本ずつが糸わくの上で簡単でしかもよく考えられた装置によって一本の糸にまとめられる。―次第に道はのぼり坂になっていく。川がさらさらといきおいよく谷に流れ、その水力は米をつく多くの水車を運転するのに使われており、その活発な音は遠くからでも聞えてくる。道の両側には見事な樹木とともに巨大な森林が広がっている。いま季節は秋で、木の葉は色あざやかな美しさを見せているが、それが本当に分かるようになるには実際に見る以外にない。

戸下は谷あいの盆地にある絵のように美しい小村で、温泉で評判のよいところである。いろいろな病氣や虚弱体質を温泉で治そうと日々、小さな馬車に乗ってここへやって来る人の数は少なくない。村の側を、けわしい岩山からさらさら流れ落ちる無数の滝の水を集めて谷川が流れているが、一方この川自体は、村の上部では狭い岩の間を抜ってしぶきをあげながら、ごうごうと音を立てて底へ落下するものすごい鮎返の滝を作っている。

やがて私はますます急勾配になって来た曲りくねった街道から離れ、山地を抜ける脇道に入

り、活火山の阿蘇の麓にある湯の谷へ向かった。約一時間ほど歩くと、道はいくつもの小道に分かれていたが、土地に不案内なため私は間違った道をたどり、やがてすっかり道に迷った。やっと森の中で斧をふるう音を聞いた私はまもなくして一人の木こりに出合ったが、彼は、お易い御用だ、と言って私を再び正しい道へ連れていってくれた。私がやっと小さな山村の湯の谷に着いた時にはすでに夜になっていた。一軒の宿屋を教えてもらい中に入ると、すぐに宿の主人が勝ち誇ったように椅子を私の室に運んでくるのを見た時には少なからず驚いた。そのようなぜいたくな物がこの深い山中にあるとは思っていなかった。ついでに言うと、周知のように日本の宿屋には家具というものが置いてないが、こんなところに椅子のようなヨーロッパ式の物があっても私はそれをたいして重視しなかった。というのは、当該家具があるとそれは当然のごとく一緒に考慮され、高い請求書となってはね返って来るからである。——冷たい風が一晩中吹き、紙障子と外側の板壁に無数のすき間のあるそまつな宿屋に泊るのはまことに不愉快だった。

翌日は阿蘇山に登るためガイドに伴われて早めに出発した。3時間の苦しい登山の後、頂上に達した。そこからは足もとに展開する山、村、川、水田の眺望がすばらしかった。すでに湯の谷でいやに感じられた強烈な硫黄の匂いがますますそれとはっきり分かるようになった。あちこちで地上から熱い蒸気が立ち昇っているのが見られた。さらに30分ほど行くと火口のふもとに来たが、そこにはひどくそまつな構えの売店が二軒あり、日本ビール、酒、それに各種の食べ物が売られていた。そこから遠くない所に小さな二つの祠があり、多くのお遍路たちの旅の目標となっている。ときおり無情な風が火口からの濃い煙雲をこちらの店の中へ吹きつけている。周囲の一带は細かい灰の層でおおわれていて、私はここで決して愉快でない生活を営んでいる神主と店の主人に同情を禁じ得なかった。

我々は飲食物で十分元気をつけた後、世界最大を誇るカルデラのある本火口丘の登頂にかかった。巨大な熔岩を除去して一種の道が作られており、そこを30分ほど登ると頂上に着いた。我々は火口の裂け目近くまで行き、ぶつぶつとあわだち、地獄のかまのように煮えたぎる底をのぞきこんだ。深い穴から濃い噴煙が立ち昇り、ときどき下から、ごうごうという雷鳴のような音が聞えてきた。——年がら年じゅう濃い噴煙が阿蘇山に降りそそぎ、灰はしばしば遠方まで運ばれる。

私はガイドを解雇した後、登りの時とは別の側を下り始めた。坊中と坂梨の村を通り過ぎ、東へと歩いて行った。長い間の歩行と石道のために足が痛くなったので、二銭で草履を一足買い、靴の代わりに履いたら、ずっと楽になった。まもなくして一人のお遍路と知り合い、一緒に街道を歩いて行った。我々が通り過ぎた所はすばらしい地区だった。ある時は、平和な村々が集まっている気持のいい谷間を過ぎ、またある時は、巨大な楠におおわれた尊い神社が我々を見下していたり、または粹な白い家が緑の中からのぞいている山を越えて行った。そして、その夜は寂しい森の中の木賃宿で過したが、そこでは米とサツマイモで我慢しなければならなかった。

翌日、三方を大きな山で囲まれた町、竹田に到着した。より便利にこの町に入れるように、岩山を貫いていくつかの大きなトンネルが掘ってある。樹木のおい茂った山の斜面に建つ屋根の低い家々のあるこの町は絵のように美しい光景を見せていた。さらに道は進んで山と谷を抜

け、多くの村、川、滝、水田の側を通り、大分へと続き、そこからさらに別府まで延びていた。海岸沿いの活気ある両都市は互に電車により結ばれている。

別府の近郊に温泉で有名な小さな湯治場の鉄輪^{かんなわ}がある。これはそこから遠くないある山のもとに湧き出、俗に「地獄」と呼ばれるいくつもの池をなしている。これらの池のあるものは相当に大きく、人々が自殺する目的でそこにとび込むという例は珍らしくないそうである。もちろん彼らは煮えたぎるような熱湯の中ですぐ死んでしまう。―― 管を通して湯は鉄輪に運ばれているが、そこにはいくつもすばらしい設備の湯屋や蒸風呂がある。―― 私は家々の前の地中にぐつぐつ煮え立っている鍋が置いてあるのを見た。そして、その一つを持ち上げてみると、驚いたことに家々の前に引いてきた熱湯がかまどの代わりをしているのに気づいた。日本の主婦たちはこの点で我が国の主婦たちよりずっと快的な生活をしている。

私はさらに別府から北へ向かって中津まで旅し、そこから何とも魅力的な耶馬溪へ日帰り旅行をした後、陸蒸気^{おか}に乗り、小倉を経由して長崎へ戻った。

独語学者としての高木敏雄



高木敏雄

高木敏雄（1876-1922）は我が国における神話学の開拓者として知られており、恐らくその功績は不朽であろう。だが一面彼は不屈の独語学者であり、生活を支えたのは主として独語教師としての収入であった。神話学者としての高木については、大林太良、大塚正文その他による研究があるが、独語学者としての側面に光りを当てたものは皆無である。彼の神話学はドイツ書の影響を強く受けていることを考えると、彼がドイツ語を学んだ意義は大きい。

高木は、1890年（明治23）9月、第五高等中学校予科補充一級に入学した。彼のドイツ語の基礎はこの五高時代に作られたと見てよい。

明治27年の大学予科時代は第一外国語独語、第二外国語英語で志望学科は史学であったが、同28年には独逸文学に変えた。文科生徒19名中、席次は2番であった。

1896年（明治29）7月五高卒業後、直ちに帝国大学文科大学独逸文学科入学、カール・フローレンツ教師の薫陶を受けた。同級に武内大造、一級上に菅野養助、二級上に小島伊佐美、一級下に片山正雄（孤村）がいた。この時代から神話学の論文を帝国文学に発表したのが、これには、師のフローレンツが古事記や日本書紀を中心とする日本の古代文学の専門家であったので、その感化もあったのではないかと思う。また、フローレンツは独文科の学生に対し、卒論は日本文学に関するテーマを選び、それをドイツ語で書くことを求めた。

高木は明治33年大学卒業と同時に母校五高の独語教授に就任した。彼は大変厳しい教師であったようだ。生徒の叱り方、鍛え方の激しさでは英語の厨川白村と独語の高木が双璧であった（『龍南』開校五十年記念特輯号、昭和12年10月）。花田大五郎は『五高時代の思出』の中で次のように述懐している。